

(7)域学連携

概要	域学連携により、重点アクションの実行を後押しする。また、オープンイノベーションによる社会実装を通じ、「対馬モデル」を構築し、国内外に成果を発信する
----	---

重点アクションの(1)～(6)を促すには、具体的な行動の根拠となるデータ、専門的知見や技術・ノウハウがなくてはならず、大学研究機関等との連携が必要不可欠です。

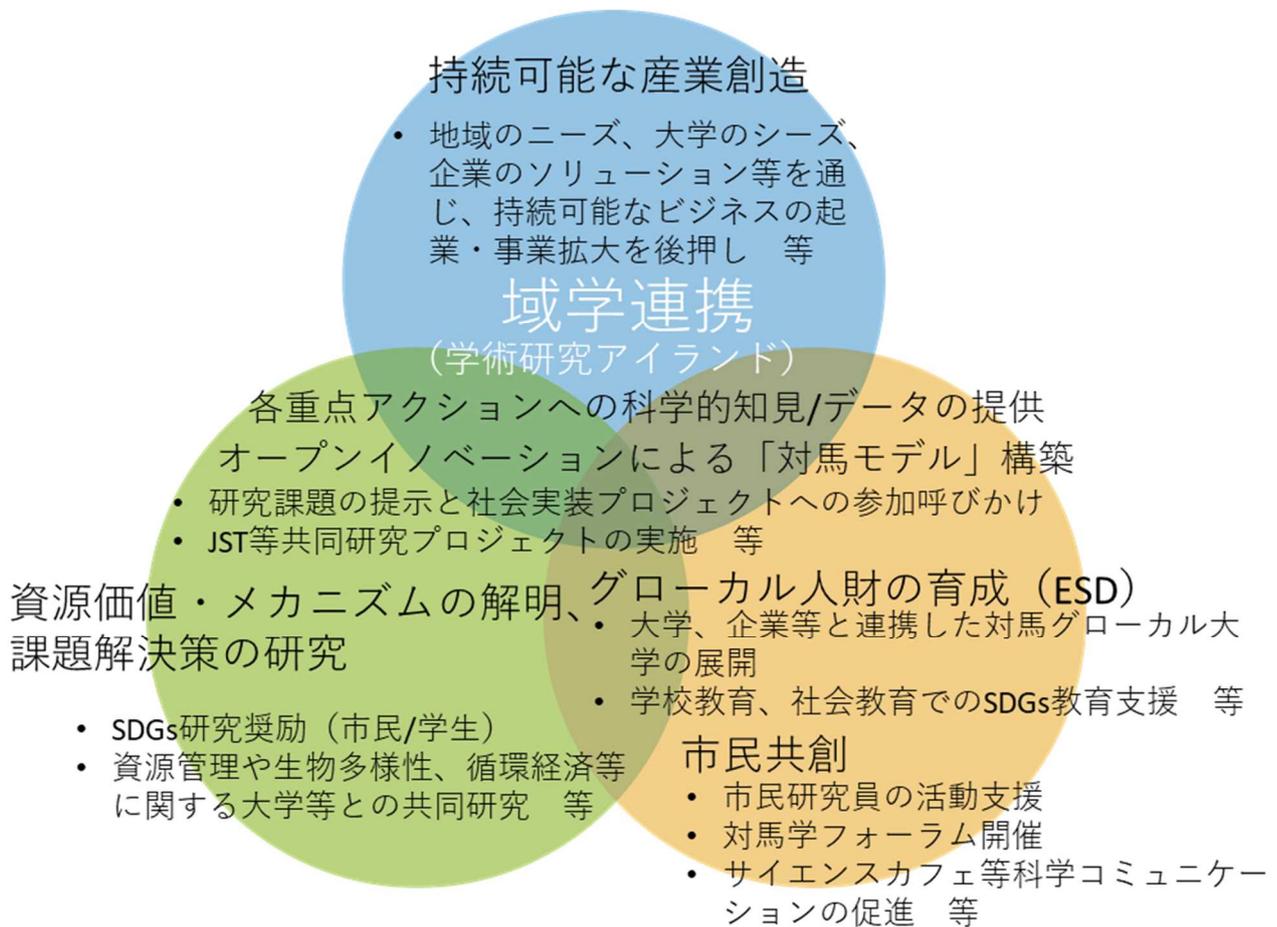


図 38 域学連携による重点アクション実行の後押しと、対馬モデル構築

対馬市は 2013 年から「域学連携」(地域と大学との連携による地域づくり)を重要政策の1つに掲げ、連携大学との共同研究プロジェクト、学術研究の奨励や活動サポート、次世代を担う人財育成、対馬学フォーラムの開催による成果の地域還元に取り組んできました。この間に築いた多分野の大学研究者や在学生・卒業生とのつながり

は SDGs を総合的に推進する際の財産となってきます。2020 年に地球規模の視点で地域課題解決に資する人づくり(グローバル人財育成)のために開講した「対馬グローバル大学」はまさにそうしたつながりと、多くの方々の理解・協力によって成り立つプログラムです。

対馬は、森・里・海がコンパクトにまとまり、そして、食、エネルギー、海洋プラスチックごみ、生物多様性など、日本・世界が直面する諸問題を抱えています。また、環海性・狭小性・隔絶性という島の地理的特性は、ヒト・モノ・カネの出入りや効果を測りやすく、学術研究の実証フィールドとしても魅力的であり、潜在性の高い地域と言えます。

対馬の域学連携の経緯や実証フィールドとしての強みを活かし、「学術研究アイランド」として、対馬と国内外に貢献しうる研究課題を発信するとともに、「対馬モデル」構築のための社会実装プロジェクトへの参画をオープンにし、研究、教育、行政機関、企業、市民、地域団体等参画する主体の知見・情報・ソリューション等を掛け合わせることで社会課題解決のイノベーションを巻き起こします。オープンにしておくことで、サステナブル・ツーリズムで来島した方々が関係人口としてプロジェクトに参画し、課題解決や新たなイノベーション創出のきっかけになることも期待できます。

その社会実装のプロセスを通



写真 14 研究・実践活動の成果を共有する「対馬学フォーラム」。市民、子ども、教員、事業者、学生、研究者等の新たなつながりとコラボを生み出す



写真 15 社会実装の例。長崎大学による海の次世代モビリティ(ASV:小型無人ボート+ROV:遠隔操作型無人潜水機)実証実験による海上・海中・海底調査システム開発

写真提供:山本郁夫教授(長崎大学)

じ、世界に先駆けた ESD として、多様な人々との交流と学び合いを推進し、グローバルな視野と行動力を持った人材を育みます。

併せて、社会実装により島の環境・社会・経済がどのように変化し、また取り組みが定着したのかの検証やモニタリングを行います。これらの取り組みを日本の離島政策や、アジア、太平洋の島しょ国に対し「対馬モデル」として発信していきます。



図 39 社会実装の例。対馬市と明治大学自動運転社会総合研究所、シダックス(株)等が連携する「対馬スマートシティ推進事業」(内閣府「未来技術社会実装」採択事業)

スライド：内閣府地方創生推進事務局 HP

「対馬モデル」とは？

環海性・隔絶性・狭小性という地理的特性によって、島ではヒト・モノ・カネの出入りを明確に捉えることが可能です。対馬は森・里・海がコンパクトにまとまり、島内での都市化・過疎化といった日本の縮図的な社会変化、地球規模の環境問題が生じていることから、対馬で諸問題の同時解決を図るチャレンジは、国内外の島づくり・地域づくりのモデルとして発信することができます。そのことが、対馬の付加価値をさらに高め、環境・社会・経済の調和と安定をもたらします。